
恋姫無双演義～黄権伝～

高島智明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫無双演義〜黄権伝〜

【Nコード】

N8619G

【作者名】

高島智明

【あらすじ】

この作品は、先に完結した2次創作『恋姫無双演義』から、さらに外伝的作品を創作した架空戦記です。

2010/04/08 各話あとがきに、次回サブタイトルを追加しました。

2010/06/18 オリジナルキャラクターの1覧を追加しました。

第1席『誰か故郷を想わざる』（前書き）

この作品は、先に完結した2次創作『恋姫無双演義』から、さらに外伝的作品を創作した架空戦記です。

2010/04/08 各話あとがきに、次回サブタイトルを追加しました。

第1席『誰か故郷を想わざる』

西暦240年。

日本史においては、女王卑弥呼の使節に対して、

「三国」の1つ、魏の皇帝からの返礼の使節が派遣された年、と記憶されている。

この時、魏の帝都、洛陽を訪れていた倭の使節たちは、おそらくは知らなかっただろう。

この都の某所で、1人の老人が、その生涯を終えた事などは。

黄権公衡

蜀の武将。生まれも益州である。

劉備による益州侵掠の以前から、益州州牧である劉璋に仕えていた。

やがて劉備が侵掠してきた時、最後まで抵抗したのは、黄権が長をつとめていた広漢県だった。

ついに、主将である劉璋の降伏によって、黄権もまた劉備に降伏した。

その後の劉備は、旧主への「義」をまっとうした黄権を、むしろ信賴し、

黄権もまた、その信賴に応えて、劉備の下で戦い続けた。

その黄権にとっても、その時が、運命の戦いとなった。

「桃園の誓い」において「同日に死のう」と誓った弟たちを失った劉備は、

その仇を討とうとして、孫呉の陸遜によって返り討ちにあってしま

った。

名軍師、諸葛孔明の「天下三分の策」が瓦解がかいした大敗戦だった。

この時、黄権は、蜀と呉の決戦の側面を、第3の敵である魏から援護する任務を、劉備から託されていた。

だが、蜀本軍の敗走で、魏の大軍の中に孤立してしまった。

大敗の衝撃、君主としての責任、弟たちの仇を討てなかった無念、そのすべてに打ちのめされて、

劉備は倒れた。そして、孔明に後を託して弟たちの後を追っていった。

その直前「寝込んで」いる状態の劉備に、心無い事を吹き込んだ奴らが出た。

「黄権が裏切りました。奴めの妻子を処刑して、見せしめにいたしましよう」

この断末魔においても、劉備は「義」に生きて来た劉備玄德だった。「裏切ったのは黄権ではない。黄権が主君に裏切られたのだ」

黄権の妻子は、むしろ劉備の命令によって保護され、黄権の子、黄崇らは劉備の後継者、劉禅に仕え続けた。

…黄権の「死後」蜀が滅亡をむかえた時、黄崇は蜀を守護して戦死している。

この1件が、中途半端に魏に伝聞された時、黄権もまた、劉備を信じた。

「劉備は、お主の妻子を殺した。蜀に忠義を尽くす必要はもうあるまい」

そういつて、魏へのあたらな忠誠を進めた者を、黄権は相手にしなかった。

間もなく、劉備が死ぬと、魏の臣下は自らの主君のために祝賀したが、黄権は沈黙を保った。

魏の皇帝、曹丕は降伏した黄権を、敵から降伏した将としては厚遇し続けた。

あくまで「信義」を貫く黄権に対して、むしろ好感を表した。

あるいは、父で太祖である曹操と関羽の間に成立した「美談」を思い浮かべたのか。

その好感は、次の皇帝である曹叅にも受け継がれた。

こうして、魏における黄権は、ほぼ蜀にあつた頃の地位を保証されたまま、

この乱世であれば、平穩とすらいえる十数年の後、

おそらくは寿命をもって、生涯を終えた。

だが、黄権の内心を誰が知る事が出来ただろう。

もしかすれば、平穩であればあるほど、自分自身が許せなかったかもしれない。

あるいは「千里行」を成しとげて、ついに劉備の下に戻った関羽に自らを比べる事があつたかもしれない。

その臨終の脳内には何が浮かんだのだろうか。

帰還することの無かつた故郷。

再会する事の無かつた家族。

あるいは、信義を互いに貫きながら、最後までその下で戦つたこと出来なかつた旧主だつたらうか。

あるいは、その旧主の下で、ともに戦った友たちだろうか。

もしかしたら、そうした「忘れ難き全て」との、分かれ道となってしまった、

あの「運命の地」の情景だったかもしれない。

あの「場所」からやり直す事が出来たなら……

その想いは「彼」の脳内を、横切っていかなかっただろうか。

蜀、あるいは益州の主要部、四川盆地。黄権の生まれ育った出身地も、その中にある。

「四川」の名のままの、いく本のもの、長江とそこに合流してくる流れ。

盆地の周辺を囲む山脈。

その「山水」の光景とは異なる、黄土の平原の光景の中で、いかなる思いを抱いていたか。

そして「蜀の犬は太陽にほえる」他国人はそうからかう。

それ程、四川盆地は曇や霧の日が多い、とも伝えられる。

その蜀に生まれ育った黄権には、洛陽は逆に晴れの日が多かっただろうか。

第1席『誰か故郷を想わざる』（後書き）

高島智明です。

反省する事もなく、またしても無謀な「3次創作」を始めてしまいました。

どうか、あまり凹む事の無いような、温かい御意見、御感想をお待ちしております。

「演義」においての「主人公陣営」である蜀の武将としては、比較的マイナーかも知れない黄権ですが、

今回の「第1席」に限っては、ほぼ史実です。したがって、次回「第2席」より「恋姫」を始めさせていただきます。

それでは続きは次回の講釈で。

今回は 第2席『再出発 困惑 迷走』の予定です。

追伸 「Arcadia」サイトに、投稿名「きらら」で投稿中の同名作品ですが、

少しでも多くの方々に、率直な御意見、御感想をいただきたいだけで、

まったく、他意はございません。

第2席『再出発 困惑 迷走』

黄権は、自分が大地を両足で踏んで、立っている事に気が付いた。

「これは夢か？」

無理も無かった。直前の記憶では、臨終の「ベッド」に横たわっているのだから。

それに、眼前の光景に見覚えがあった。いや、見忘れる事など出来なかった。

南に長江が流れ、その流れが三峡渓谷を刻んで流れ下ってくる、その山脈が西にそびえ、

そして、北と東に荊州の平原がひらけた「この」地、“ここ”で自分は、余りにも多くを失った。

そして、魏の洛陽で死んだ筈だった。

だが、再び、今、この地に立っている。

その地を踏みしめる両足も、臨終のなえた足の感触ではない。

身にまとった甲冑の感触も、頼りがいが有りそうながら、重くない。腰に手をやれば、剣があった。その剣を振ってみた腕にも、かつての力が戻っていた。

「夢なら夢でかまわん」

今、元気で「この地」に立っているのだ。

何度「ここ」から、やり直したいと願ったか、分からぬ「この地」に。

そして、今のこの体には、ここから蜀に帰るだけの力が戻っている。帰りなん、いざ。

・
・
・
・
・

少し冷静を取り戻すと、何といつても「今」の黄権は、歴戦の老将なのだから、

今の自分の立場が、魏から蜀への脱走に当たる事に気が付いた。

魏兵に見付けられると、ややこしい事になるかも知れない。それに、当座のものは持っているだろうか。

………
そこで、道ばたで目に付いた、ひなびた村で聞き込みをする事にした。

先ず、自分が魏に追われているかどうか、それとなく確認する。さらに、好意に甘えることが出来れば、入手できそうなものを入手する。

この場合、1剣をもって、好意に返せるものなら、役に立たせてもらおう。

ところが、村に入っただけしばらくするうちに、違和感が気が付き始めた。

村人たちが親切過ぎる。

最初の内は「敬老」精神を發揮しているかとも、思っていたが、それにしても、視線や態度が生暖かい。

それに、平原の真ん中に居た時には分からなかったが、目線が低い？さらには、目に入る、自分の「首から下」がなぜか……

「鏡は無いか？」その声も、そういえば、かん高い。

「そうですね。貴女には、お入りでしょう。荷物にならなければ、お持ちになりますか？」

そう言われながら、差し出された銅鏡に映っていたのは……

……美少女だった。

年頃は、幼女から乙女に変わる微妙な時期。(どこかの「天の国」なら「ロリ」を卒業する前後)
容姿は愛くるしい。

身にまとう甲冑も、その魅力に合わせるかのように、手が加えられている。

鏡の中の少女が、おそらくは何歳か成長して、こんな甲冑をまえば、その「玉の肌」をむしろ強調しそうだ。

しかし、そんな甲冑が、すでに似合う程に、愛くるしい。

思わず声が上がったが、その声も「キャア」の類だった。

・
・
・
・
村で生暖かくゆずってもらった馬に乗って、ポクリポクリと進んでいた。

あまりの「現実」に、思考が付いて行っていない。

そのためか、変なやつらがウロウロしている、変な道へ踏み込んでしまった。

「へっへえ。もうチヨイ育てば、けっこう上玉になるぜ」

にたにたと、そんな事をぬかしながら近寄ってきた、頭に黄色い布を巻き付けた変なやつらを見て、

流石に「中身」は百戦錬磨の黄権は、自分を取り戻した。

剣に手が伸びてからは、条件反射で身体が動いていた。

経験値は有り余る「中身」に、この見た目は幼い身体は付いて来ないや、それ以上に身が軽い。

思う存分に戦えた。

結果は、逆に当座を増やす事ができた。

……

問題は、むしろ、生き残りを尋問して聞き出した、情報の方だった。こやつらは「黄巾賊」ないしは「黄巾」に便乗したやつらだと主張

している。

さらに「今」は、まさしく「黄巾の乱」が勃発した「甲子」の年だと主張した。

「以前」の黄権なら、鼻先で笑うところだろうが、自分の身に起きている事態からして、笑えない。

黄権の「没年」は西暦240年。黄巾の乱は西暦184年に当たる。

ますます、困惑しながら、しかし馬に任せるように、三峡溪谷をさかのぼって行った。

・
・
・
・

その先に広がるのは四川盆地。何もかもみんな懐かしい光景が、黄権の眼前にあった。

その感動に身をゆだねたままに、巴郡の郡城の門をくぐってしまった。

当然のように、門番の兵士に呼び止められる。

(…確かに、こんな「小娘」が武将を気取った姿をしていけば不審だろう…)

実は、単に「黄巾」に便乗した変なやつらがウロウロしている時勢だったから、というのに過ぎなかったのだが。

そんな「小娘」というだけで不審な訳ではない事を、直に知らされる事になった。

なぜなら、番兵に連行された先で、尋問された「郡太守」が、巖顔だったからだ。

黄権の側では「変わり果てた」旧知にまず仰天うやうやしくし、

次いで、数語を交わした後、確かに「中身」は黄権の知っている巖顔だと認めざるを得なかった。

自分自身が、この体たらくなのだから。

そして、次には、内心で泣いていた。

相手が敵顔だと理解できれば、当然に懐かしい。しかし、その「旧知」には、自分が分からない。

いや、もしかしたら、黄権の記憶が「この」敵顔には、無いとすら疑える節すらあった。

… … … … …

ついに、黄権は耐え切れなくなった。

姿はともかく、黄権を知らない敵顔。

どこを見ても懐かしいのに、しかし、自分を待っている人がいるか、どうかすら不明な四川の光景。

しかも、50余年も「時代」はさかのぼってしまった。

中途半端に懐かしいだけに、あまりにも今の黄権には残酷だった。

「これが…これが、あの裏切りの罰だと言うのか…教えて欲しい！

「天」よ」

もはや、巴郡より奥の蜀の地に踏み込み、黄家の家族や、敵顔以外の知人を捜し求める勇気すら失って、

逃げるように黄権は、長江を下る船に身を任せてしまった。

身も心も迷走する状態になってしまった場合、人1人見ない場所かあるいは逆に、群集と言いたいほどの人が多い場所を求めるものらしい。

懐かしい筈の蜀の地から逃げ出すように、長江を下って来た黄権は、その周辺では、最も人の多い、

荊州の中心都市である襄陽に、さ迷い込んでいた。

「黄巾」に便乗した、変なやつらも、この襄陽の城内まではウロウロしていないらしい。

未だに、乱世を免れている城内の喧騒けんそうの中を、黄権は迷走していた。

その黄権の目に、ふと止まった人物がいた。

見覚えの無い筈の少女。だが、なぜか「デジャヴ」を感じる。

敵顔の場合とは微妙に差のある、しかし記憶のどこかが懐かしい。その記憶のどこかの何かと、その少女の色の薄い眉が結び付いた。

「白眉?!」

荊州出身の蜀の臣。

黄権が蜀を「裏切る」結果になった、あの戦いでは、蜀の名の有る臣下だけでも何人もが倒れた。

その中でも、その才を惜しまれたのは「白眉」馬良だったろう。

馬良（真名胡蝶）の側は、自分を見つめる見覚えの無い少女に、当然ながら眉を軽くひそめていた。

荊州襄陽からは、東北に離れた、幽州楼桑村。

「劉備玄德」桃花の薄紅とモザイクになった蒼天を「靖王伝家」の宝剣が指す。

「関羽雲長」左右から「青龍偃月刀」が、

「張飛益徳」そして「蛇矛」が合わせられる。

「……我ら誓う……」

我ら三人、姓は違えども姉妹の契りを結びしからは、心を同じくして助け合い、困窮する者たちを救わん。

上は国家に報い、下は民を安んずることを誓う。

同年、同月、同日に生まれることを得ずとも、願わくば同年、同月、同日に死せん事を。

天よ地よ、この心の真実を。義に背き恩を忘れるならば、天も人も

殺したまえ！

第2席『再出発 困惑 迷走』（後書き）

それでは続きは次回の講釈で。

次回は 第3席『身は襄城に在って、心はいずこに在る』の予定です。

御意見、御感想をお待ちしております。

第3席『身は裏城に在って、心はいずこに在る』(前書き)

もう1度だけ、申し上げます。

この「外史」は、黄権にとっては「前世」すなわち「正史」での人生をやり直している、

「後世世界」といふべき「世界」です。

第3席『身は襄城に在つて、心はいずこに在る』

荊州襄陽の城内。黄権は「水鏡女学院」の内部に入り込んでいた。まったく「入り込んで」いるのであつて、未だ入塾した訳ではないが、しかし、ここは居心地が良い。その理由も自覚できていた。

「行きましよう…「伏竜鳳雛」を迎えれば、人々を救えるなら、行きましよう」

まるで、天竺へ行くと言う三蔵法師だった。

ここには、懐かしい者たちがいた。

黄権ら益州出身者たちと並んで、蜀の帝王、劉備に仕えた荊州出身者たち。

同じ益州出身の厳顔たちと異なつて、感情の上で1線があつた。“前世”では。

だが「現在」は、そのためにかえつて、素直に懐かしがる事が出来た。

厳顔や巴郡の光景を正面にした時の様な、激情に取りつかれることも無く。

… … … … …
無論、初対面では、馬良に不審がられた。

「私を「白眉」と呼ぶ人は何人か居ますが、貴女に見覚えはありません」

これでも「良い意味での優等生」である、馬良（胡蝶）だから、親切に対応したのである。

「…いや、この荊州でも「白眉」は特に良し、とまで呼ばれる“茂才”が謙遜するまでもなかるう」

後漢王朝の初代皇帝には、本名に「秀」の字が入っているため、この時代の人は「秀才」を「茂才」と言い換えている。
無論、後世の歴史家が「現代語訳」する場合には、かまわない。

これで、テレながらも、半分は警戒心を解いてくれた。

これを切欠にして「水鏡女学院」に入り込んだ黄権だが、ただ、懐かしがるだけでなく、
多くの情報を得ることが出来た。

学問の府、

荊州の中心都市という、大都市、
長江に合流する漢水と、街道が交叉する、交通の要衝。

情報の集まる条件が集まった環境で、多くの情報を得る事が出来た。
最も重大な情報は「前世」と「この世界」のどこが異なっているか
だった。

嚴顔や馬良の例があつた様に、黄権が直接、間接に名を知っていた、
多くの人物が、“ここ”では女性らしい。
それも、年齢的に現時点で、乙女と呼ばれる年代に集まっているらしい。

大体、“この時代”では、女性、それも少女と呼ばれる様な若い女性
性であっても、
自らの才能と実力と人望次第では、武将にも文官にも、あるいはそれを率いる主君にもなれる時代らしいのだ。

そのため、そうした少女たちの内の、荊州襄陽「名士グループ」出身者たちが、この「水鏡女学院」に学んでいた。

・
・
・
・
・
その中には、黄権にとっては懐かしい
「旧主」劉備に従って、荊州から蜀にやって来た、
その後は、黄権とも並んで劉備に仕えた者たちが、何人も居た。

一方で、入蜀より以前に、劉備から離れた徐庶や、入蜀の途上で急死した鳳統などは、

「前世」の黄権からすれば、名を知るのみだろうが、
しかし、ここでは、馬良たちと同様に、黄権を受け入れてくれていた。

そして、諸葛亮孔明。

「五丈原」を風の噂に聞いた「前世」を持つ、黄権にとっては、“
現在”の愛くるしい諸葛亮を見れば、
どうしてもあの悔恨が、体内をかすめて行く。

(…私も「五丈原」で「丞相」とともに戦いたかった…)

馬良や諸葛亮たちによって、故郷、蜀を想う内心を、密かにいやさ
れながらも、

より心身の深くから、浮かび上がってくる感情を自覚し始めていた。

何度も「主君」を変える結果になってしまった黄権だが、その中で
1人を選択する事が可能なら、

「現在」でもそれは、蜀の「先帝」劉備に間ちがい無い。

(…「この」諸葛亮も「三顧の礼」を受けて「先帝」陛下に仕える
のか?…)

漢水を間にして、双子都市を形づくる襄陽。その双子都市のもう一
方から、東北の幽州へと続く街道を、

南西の双子都市へと、近付きつつある1行があった。

まるで、天竺へ向う三蔵法師が、孫悟空の引く白馬に乗っているかのように、

真っ直に前方を見定めた、馬上の美少女。

それを、三蔵法師を守護する孫悟空の様に守護する美丈夫と、元気一杯な微笑ましい少女。

その後ろからは、“どこかで見た様な”4輪車が、なぜがカラのまま引かれて来ていた。

「今年」は、まさしく「あの」黄巾賊が「歳在甲子」と唱えた、その「甲子」の年に間ちがい無かった。

そして、黄権も聞き知っていた。

「先帝」が「桃園の誓い」をもって「義」によって起ったのも、まさしく「この時」だったと。

たとえ「ここ」の劉備が、もしも少女であっても、やはり「起つ」だろう。

いや、すでに、どこかで黄巾と戦っているのかも知れなかった。

(…それなのに、私はこの襄陽で、何をしているのだ…)

双子都市の間の漢水を行き交う連絡船の上。近づく船着場は、もう襄陽の城内だった。

(…俺はここで、何をしているんだ…)

北郷一刀には、自分が大それた詐欺でもやっている気分が、どうしてもしていた。

『聖フランチェスカ学園』から、「三国志」の時代に飛ばされ、黄巾賊の追い剥ぎに会い、関羽に救われた。

そして「天の御遣い」だから、この国を救ってくれなどと言われて、関羽と張飛なら、劉備の処へ行けと教えた。

そうしたら「桃園の誓い」を成立させてしまい、ますます「天の御遣い」と誤解されてしまって、

「これからどうする？」みたいな「お告げ」を期待された。

それで「孔明」に聞いてくれと言ってしまう、幽州の楼桑村から、荊州襄陽まで連れて来られた。

ついでに、なぜか劉備たちが「女の子」です。これ？なんてエロゲ

……

身体がなまらない程度に、今でも剣は振ってみている。

この身体は軽い。見た目は幼い少女（諸葛亮たちが同程度に見える）だが、

「前世」で鍛えた「経験値」の通りに、いや、それ以上に動いてくれる。

それに、知識面での「中身」も、將軍職まで務めた「老将」である。そして「この」時代は、たとえ女であろうと、それも年若い少女であろうと、仕官の妨げにならないらしい。

まして「黄巾」の最中なら、仕官の当てはあるだろう。

そう、仕官しようとするれば、可能性が見えるだけに、黄権は迷っていた。

仕官の可能性を考える度に、どうしても「先帝」の事を考えてしま

う。

……その黄権が、剣を収めるのを待つて、声をかけて来た。

「公衡どの」「元直どのか」

その辺りの誰かに、質問しようとしていた。

そこへ「お姉ちゃん達「水鏡先生」はどこか？なんて聞いているよね？」などと、子供の声で、声をかけて来た。

牛車に、買い物らしきものを満載して、運んでいた男の子。

三国志フアンの一刀には、心当たりがあった。

「坊やは、もしかして「水鏡先生」のところの牛飼い君かな？」

「そうだよ。師母様のお使いの帰りだよ」

……それで、牛に引かれて行くと「水鏡女学院」の看板を門の上にかけた、城内の屋敷に案内された。

(…何でもありだな「この」世界。それに「女」学院だよ…)

黄権は、自分で自分の「真名」を付けるべきか、どうか迷っていた。

何より「その真名」を捧げるべき相手は……

第3席『身は裏城に在って、心はいずこに在る』(後書き)

それでは続きは次回の講釈で。

次回は 第4席『三顧の礼』の予定です。

御意見、御感想をお待ちしております。

第4席『三顧の礼』

その日、黄権が「水鏡女学院」を訪問すると、異変が起きていた。何事も「好好」で片付ける師母、水鏡先生らしくなく、かなり徐庶を叱っている。

しかも、元侠客だからこそ、逆に義理堅い徐庶が何と口答えをしてすらいた。

ひそひそとその様子をつかがう少女たちに、黄権は近付いてみた。

未だに「真名」ではなく「字」止まりの付き合いで、

また、普段は「爺じいくさい」しゃべり方を面白がられているが、

それでも、ここで、仲間はずれにされない程度の付き合いにはなっている。

「いったい何事だ？」

「それが、この前、門前払いした、どこの誰かに蛍先輩がだまされているみたいなの」

「どこの誰か……」

「そうよ。幽州辺りから「伏竜鳳雛」に会わせろなんて、突然に押しかけて来て」

幽州……

「門前払いは当然でしょ。それなのに、城内に宿を取って居座ったみたいだから」

「蛍先輩が「正体」を見極めてやると言っただけなのに」

「逆に先輩が言いくるめられてしまったらしく、今度は先輩が案内して来たのよ」

そういえば、諸葛亮と鳳統がこの場にはいない。というより、面倒見の良い馬良が遠ざけていた。

けた後を、自らの拠点として、
事実上の王国がつくられ、そうした幾つもの小王国にこの帝国は分
割されていきます。

そうした、群雄の中の1人が他の群雄を倒して、新しい「帝国」を
つくるまで、天下に太平は来ますまい。

もし、この時代において人々を救いたいなら、自分がその1人にな
るしかないでしょう。

幾つもの小王国をたてる群雄の中の1人。

おそらく、それらの「王国」が3つ程にも淘汰されれば、一時は天
下も安定するでしょう。

その「三分」のうちの1人。

そして「三分」もいつかは、ただ1人によって統一されるでしょう。
その最後の1人。

「その1人となる「英雄」にしか、結局は多くの人々は救えません」

「私には、そんな力は無いでしょう。妹たちには「一騎当千」の「
武」の力はあっても」

それでも、私は何かをしなければなりません。

「……………」

「力の無い人を苛める世の中を、誰かが絶対に変えなければならな
いのです!!」

教えて下さい。私に何が出来るのかを。

黄権が身を潜めているのと同じ部屋では、除庶と水鏡先生も耳をす
ましていた。

「どうやら、どこぞで伏竜鳳雛の風聞を聞き込んできた、ただの野
心家とも限っていなかったようね。蚩」

やはり「三顧の礼」とは、主君となるかも知れない相手の「志」を試すものだった。

「はうう…わ、私たちも」

「あう…ずっと思っていました」

この私塾で学んできた知識を、困っている世の中の人たちのために役立てたいと。

それを一緒に出来る主君に仕えたいと思っていました。

でも、この乱世をもっと大きくする様な野心家に利用されるのが怖くて、ずっと待っていたんです。

「この人は、民人のために戦おうとしていると、信じられる御方を」

… … …

別室で待っていた、妹たちも加わって、あらためての自己紹介が始まった。が、

「これから私の事は、桃香と呼んでください」

「姉者、いきなり真名をとほ」

そう、この世界での「真名」とは、本当に心を許した相手にのみ呼ばせる事を許す、

文字通りの「まことの名前」といっていい。

「これからは仲間だよ。それに…今の私にはこれしか出来ないから」

「姉者がそこまでおっしゃるなら…わが姓は関、名は羽、字は雲張、真名は愛紗。よろしく頼む」

「姓は張、名は飛、字は益徳、真名は鈴々なのだ。よろしくっ」

「姓は諸葛、名は亮、字は孔明、真名は朱里です。よろしく願います」

「姓は鳳、名は統、字は士元、真名は雛里です。よろしく願います」

黄権の両目からは、もはや涙の止めようが無かった。

(…陛下!…今の私には、未だ、陛下に捧げる「真名」がありません)

届けて塾に戻っている筈だった。

その後、黄権1人が、対岸、いや東北の幽州の方角を見続けていた。

「どうされた？公衡どの」

「霧花……」

「？」

「蜀の犬は太陽にほえる”それほど、益州は雲や霧の日が多い。だが、逆に洛陽や襄陽は晴れの日が多い」

「……」

「すまぬ。元直どの。もしも、私が「霧花」などと言う、女らしい名前を捧げる相手がいるとしたら……」

第4席『三顧の礼』（後書き）

それでは続きは次回の講釈で。

今回は 第5席『わが真名は霧花』の予定です。

御意見、御感想をお待ちしております。

第5席『わが真名は霧花』

劉備を見てしまった。あの魅力を確認できる近さから、あの「旧主」を見てしまったからには、
ぐだぐだと迷っていた事すら、もはや無意味に思えた。

…あの「三顧の礼」の場面に限らない。

あの船着場でも「先帝」いや「ここ」では、真名を桃香様とか言っていた、

あの方に「霧花」とか何かの「真名」らしきものを捧げてしまえば良かったのだ…

そう決心してしまえば、なすべき行動は1つしか無かった。

「水鏡女学院」をはじめ、短い間ながらも世話になった襄陽の人たちに非礼をわびると、

黄権、今は「自ら」真名を「霧花」と定めた彼女は、主君たちを追って東北へと向った。

だが間もなく、霧花はここでの数日の遅れを後悔する。「前世」の「あの戦い」以来の後悔で。

… … … … …
荊州襄陽城から幽州へ、後漢帝国の版図を南から東北へ横切る旅。
しかも、その国土は当時は黄巾賊が暴れ回っていた。

実のところ、襄陽こそ平穏だったが、その北に隣り合う荊州南陽郡から南陽郡の東北に隣り合う予州汝南郡までが、
黄巾の乱に置ける「最悪」の被害地帯だったと言い切れる。

そんな「最悪」地帯が「最短コース」上にある旅ならば、いくら関

この程度まで打ち明けた理由は、いざ離脱する時の伏線の他に情報収集の目的もあった。

おそらく、求める「主君」は、今から幽州まで行ってもそこにどどまっているとは限らない。

黄巾賊を追って、戦いながら移動している可能性がある。

その行き先を知るためには、官軍に所属している方が、情報を集めやすいかも知れなかった。

なにせ、関羽と張飛の武勇だけではなく、諸葛亮に加えて鳳統がすでに軍師として補佐しているのだ。

「前世」よりも、名を上げている可能性だっただけだ。

……。

……。

…そのうちに、官軍の將軍たち、皇甫嵩や朱儁に意見の対立が生じ始めた。

現在、相手にしている黄巾「軍」は、人数や勢いならば「主力」だろう。

だが、最大の標的である、首領の張姉妹は「ここ」にはいないのではないか？

この件についての、興味深い情報とともに、官軍に参加した「1軍」があった。

元々、長江の海賊退治から旗を上げたその軍は、長江の水運関係から、

支流の1つが近くを流れている、荊州南陽郡の郡城があやしいとの情報を得てきた。

この情報に基づいて、南陽に転進するように主張する朱儁と、あくまで、目前の「主力」との決着を付けるべきとする皇甫嵩は、

わざわざ、霧花を呼び出してこうした事を伝えた皇甫嵩の側は、親切のつもりだった。

「正史」においても、自分の功績は同僚にゆずり恨まれる事も無かった、などと評価されているぐらいだから。

「公衡が仕官するつもりなの、何と言ったかのう」

「劉玄德様です」

「そうじゃ。その劉玄徳の「義軍」じゃがな。公孫軍に身を寄せていたらしい」

南陽の張姉妹を攻めた時も、それなりに手柄を立てたようじゃ。

「…そうですか…」（またしてもか）

……。

…しかし、この広宗まで連れてきていただいた、恩義もあります。広宗城が落ちるまでは、従軍いたしましょう。

「そうか。しかし、わが官軍でも公衡はそれなりに働いておる。帝都まで付いて参れば悪いようにはせんが」

「ご無礼はお許しください。今の私は何よりも自分自身の決心に正直でありたいのです」

「そうか。公孫賛めは、これで「恩師の恥はそそげた」と考えたらしく、幽州の拠点に戻るようじゃ」

例の「義軍」とやらが、離脱したとの話も聞かん。

「感謝します」

（…）幸い、この冀州はもう、幽州からは隣の州だ。後、もう少しで…）

……。

……。

…ところが、広宗城を落とした皇甫嵩の元に「全軍」をあげて、帝都に帰還せよとの、
大將軍何進の直々の命令が届いた。

このため、霧花が広宗から真つ直ぐに幽州へ向っては、脱走になってしまった。

しかも、大軍を引きずって延々と行軍していくと、

今度は「相国」董卓の名前で、

「虎牢関」に軍を入れずに、その手前までで解散させよ。皇甫嵩の
みが帝都に帰還せよ。

との新しい命令が届いた。

当然に軍のほとんどが憤慨したが、早く幽州へ行きたい霧花はむしろ
ホツとした気分だった。

それよりも、霧花の記憶が、1連の「キーワード」によって浮かび
上がって来ていた。

(…虎牢関、董卓、そして「陛下」は公孫賛の下に…)
話には聞いていた「あの」雄将、呂布の名を思い浮かべ、武者震い
すらする霧花だった。

第5席『わが真名は霧花』(後書き)

それでは続きは次回の講釈で。

次回は 第6席『西南の望郷・東北の再会』の予定です。

御意見、御感想をお待ちしております。

第6席『西南の望郷・東北の再会』

長城。蜀に生まれ育った「前世」と「現世」を通じて、霧花が初めて見る北の国境。

その長城を片側の地平線に見ながら平行しつつ、黄砂の吹き付ける平原を進んでいた。

・
・
・
・
・

その進行方向の地平線から黄砂を巻き上げて、中身は「歴戦」の黄権には明らかな軍勢が進軍して来る。

平原の中でも、人1人と馬1頭が隠れる物陰くらいはある。そこから、どこの軍勢かを確かめた。

旗印から、この幽州の地方軍閥、公孫贇の軍である事を確認する。進軍方向から見て、反「董卓」の檄げきにけき応えて、帝都の方へ向っているのだろう。

・
・
・
・
・

もう1つ、重要な事があった。

公孫軍の中軍、公孫贇自らが率いる白馬隊の後から付いて来るその1隊。

軍装などは公孫軍の中では微妙に浮いているが、けっこう統制はしつかり取れているらしいその隊の、陣頭を誘導しているのは「三顧の礼」の時に見覚えた、関羽と張飛だった。

そして、その隊の中央、あの時見送った「4輪車」をすぐ後ろにしたがえて騎乗している、

その優しげな少女の姿を見止めた時、霧花は思わず飛び出しそうに

なった。

(…やっと、ここまでたどり着いた…)

…
…
…
その夕刻、野営の予定地で宿営の準備に追われている公孫軍に、紛れ込んで来た。

当然、見張りの兵士によって、上官のところに連行されて尋問される。

「わが主君を求めて参った」

そう主張する甲冑姿の少女は、結局は段々に上官から上官の元へ送られて行き、

最終的に、主将である公孫贄（白蓮）の天幕まで連行された。

…
…
…
「どこで評判を聞きつけて、はるばるとやって来たのかな」

そう確かめられて、礼を取った体勢のまま、自分の思うところを口に出す。

「荊州襄陽城におきまして「三顧の礼」を目撃いたし……」

「………つたく、姉妹弟子だったのに。何であの娘だけ、こつも人望があるのかね」

ボヤキみたいな事を言いつつも、劉備軍の天幕まで案内するよう、当番の兵士に命じてくれた。

…
…
…
その兵士は、白蓮に命じられた事だけを告げると、霧花を置いていった。

「私は荊州襄陽上にて「三顧の礼」を目撃いたし、わが「真名」を捧げる御方はただ1人と決めました」

「ほう、嬉しい事を言ってくれるではないか」

この関羽の反応も、旧知の関羽らしい。

その隣の無邪気そうな張飛。

反対側にいた諸葛亮と鳳統も「はわあわ」言いながら、「水鏡女学院」に出入りしていた事を確認してくれた。

そして、正面の劉備と、その隣の見知らぬ少年。「三顧の礼」の時も立ち会っていたが、見覚えが無い。

「前世」での旧知に会って、数語も言葉を交わせば、記憶が戻ってくるのだが。

それよりも、劉備たちが沈黙している間に「攻め」に出るべきだった。

「主君」に対する礼を失しない様に注意しつつも、霧花は言い出した。

「わが姓は黄、名は権、字は公衡。そして、真名は霧花と申します。この真名をただ一人のご主君に捧げます」

「黄権だつて?!」少年がなぜか驚いていた。

「ご主人様?」「いや、桃香には、話す時にはちゃんと話すから」「わかりました。ご主人様を信じます」

(…そういうことか…)

「今」の劉備は「少女」なのだから「ご主人様」と呼ぶ相手が居る事もあるだろう。

(…「先帝」は、お妃の御縁に恵まれなされた、とも言い切れなかった…)

「今度」の主君には、その意味でも幸福になつて欲しい。

その「ご主人様」は「黄権」なら多分は信頼出来ると、なぜか弁護してくれていた。

やがて、劉備は、まだ何か言いたそうな関羽を片手を上げて押し止めると、

その手で霧花を立ち上がらせた。

「私は桃香よ。よろしくね。霧花ちゃん」

(…帰って来た。私が戻るべき御方の下へ…)

…

その夜、あてがわれた天幕の1つから表に出てみた。

この幽州は、後漢13州の中でも東北の端に位置する。

夜風にも黄砂が混じっていた。

“「黄権」の生まれ育った”益州は、13州の中で反対側の西南に位置する。

「蜀の犬は太陽にほえる」などと他国者に言われる程、霧の日が多い。

(…この地が、わが御主君の故郷…)

あるいは、その主君に仕えて、この黄砂の吹く地で果てるか。

それでも、あの「前世」よりは後悔すまい。

だが現在、その主君は自らの故郷を離れて、まるで蜀に近付いているように西南の方角へと進軍しつつあった。

…

…

…劉備玄徳の「義軍」は、公孫軍とともに尚も新軍していく。

やがて黄河を渡渉して、その黄河と帝都洛陽にさかのぼれる洛水が分かれる「敖倉」で、連合軍に追いついた。

連合軍が宿営している間の、空いた場所に設営している公孫軍に混じって、劉備軍も設営作業をしていた。

当然に霧花も、自分の指揮下に入った兵士たちとともに作業していた。

その途中、ちよつとした「お使い」に出た霧花が、連合軍の本営近くで見とめた2人組。

傍目には、どこかの軍に徴用された雑用の少年がサボっていたのを、中級の将が叱っている程度に見えるだろう。だが、その片方の少年に見覚えがあった。

いつもの、光り輝く「天の衣」ではないが、今は「義軍」の1員になっっている霧花には分かる。

この進軍の途上でも「天の御遣い」については聞いていた。管路の占い。霧花もこの時代の人である。

誰も見た事の無い、光り輝く「天の衣」。確かに「前世」の人生経験をして、見覚えが無い。

そして「桃園の誓い」も「三顧の礼」も、その「天のお告げ」によって成立させたと聞いた。

その「天の御遣い」が、ほぼ同じ年頃の少年ながら身にまとっている甲冑の美々しさから見れば、かなりの地位に居るであろう相手と密会していた。

やがて、密会の相手が姿を消した「タイミング」をとらえて、霧花は声をかけてみた。

「ご主人様」主君がこう読んでいるから、それに習っている。

「あれ、霧花…だよな」

「ご無礼でしょうが、先刻の御方は？」

「見てたのか…。…曹仲徳だよ。曹操の弟の」

(…魏の太祖にそんな弟がいただろうか？「仲徳」というからには「孟徳」のすぐ下の弟だろうか…)

「南陽で黄巾と戦っていた時に、ちょっとした事があってね。知り合いになった」

桃香のためには、そんな知り合いが曹操の身近にいる事も、損にはならないだろう。

信用する事にした。不審な事はいくつがあっても、この「天の御遣い」は主君である桃香に必要なだ。

「前世」の人生経験がある霧花には、お似合いの若い2人に見えていた。

それに「それどころ」でも無いかも知れない。

眼前には、帝都自体を含めて、少なくとも3つの「難攻不落」の敵城がある。

しかも、そこには、あの「人中の雄将」が待ちかまえているのだから。

第6席『西南の望郷・東北の再会』（後書き）

それでは続きは次回の講釈で。

今回は 第7席『帝都落月』～洛陽は燃えているか～
の予定です。

御意見、御感想をお待ちしております。

第7席『帝都落月』く洛陽は燃えているか

連合軍と董卓軍の第1戦は、結果からすればあっさりと終わった。

洛水沿いの街道を封鎖する関城を波状攻撃する連合軍の中で、公孫賛軍の出番が回ってきた時、
離里の「中策」を採用した桃香が「魔王董卓の10の罪」を糾弾すると、

守将の華雄は完全に逆上してしまい、愛紗との1騎打ちに乗ってしまった。

そして、愛紗に1撃どころか「ミネウチ」で気絶させられてしまい、その好機に乗じた孫呉軍が突入して占領してしまった。

しかし、次の「虎牢関」は、こうはいかないだろう。

何せ「あの」呂布が待ちかまえている。

……。

…「天の国」では「電撃戦」とか言つらしい、いかにも呂布らしい戦いを仕掛けてきた雄将を、

連合軍の本営の手前で、愛紗と鈴々と、公孫軍の客将にいた張雲が総がかりで押し止めた。

確かに、呂布ではこの手段しかなかっただろう。

その間に、曹操軍や孫呉軍などの連合軍が立ち直り、逆に虎牢関に迫ろうとする。

これに対して反転した董卓軍と連合軍が混戦になっている間に、虎牢関の直前に空白が出来ている事を、

竜鳳の軍師が見抜いた。

愛紗と鈴々、そして「こちらの方が面白そうだ」と客将の気軽さで付き合った趙雲が突破口を切り開き、劉備玄德の「劉」の旗と、「天の御遣い」を示す「十」の旗を押し立てた「義軍」は一気に戦場を駆け上がった。

当然に霧花も、その中にいる。

陣頭に最大の攻撃力が集中してしまった「義軍」の側面を援護する任務についていた。

虎牢関の門前に到着すると、そのまま、守備の兵士もそれを率いる将も今は不足している関城に襲いかかる。

霧花も、朱里が改良した連弩（「前世」の孔明も発明している）を指揮して、城壁上の敵兵に頭を引っ込めさせる。

その間に、愛紗が鈴々を文字通りに城内に投げ込むと、内側から城門を蹴り破った。

一気に突入すると、楼門城に「劉」と「十」の旗を高々と掲げる。

この旗が、董卓軍に対してのトドメとなった。

・
・
・
・
・

呂布と軍師の陳宮は、逃亡して行方不明。

副将格の張遼は曹操軍に捕らえられて、虎牢関の董卓軍は壊滅した。

残るは帝都洛陽だった。

・
・
・
・
・

しかし、霧花が「黄権」として知っている筈の「前世」よりも、手際が良過ぎた。

「伏竜鳳雛」が付いているからだろうが、その「三顧の礼」をこんなに早く成立させてしまったことと言い、

「天の御遣い」というのは、あながちホラとも思えない。

だが、部下に隠し事をする主君でもない。

そして、今回の「当直」は「その」事と無関係ではなかった。

……
……
……
「あの」董卓を生け捕りにして来る？胡散臭い」

……だが、本当に連れて来た。

よっぽど、こちらの方が「黄権」だった時に話に聞いていた「董卓」のような絵に描いたような悪漢が、
数人の「部下」というより「手下」とともに、2人の少女を担ぎ込んで「かくれ道」の出口から現れた。

「董卓」を連れて来るのではなかったのか？董卓の侍女など献上しても、わが主君は喜ばんぞ」

残念ながら、今の霧花の立場では主君に取り次ぐしかなかった。

……
……
……
何とも「人形のような」あの儂はかなげな少女は、本当に「董卓」だったらしい。

曹操姉弟が捕虜にしていた張遼や華雄を連れて来て、首実験をしていった。

(…どうなっているのだ？「この世」は…)

……
……
……
どちらにせよ「董卓」と軍師の賈馱はそのまま、桃香や「ご主人様」の侍女にされていた。

侍女が仕えている事自体はいい。「黄権」だった霧花が知っている「主君」は蜀の帝王だった。

それに、中国人の考える「面子」からすれば「相国」まで成り上がった身が、

侍女まで成り下がった姿を晒せば首を取ったも同然。

そして、取ったのは「劉備」である。

もつとも桃香などは、こつするのが月（董卓の真名）を助ける事になると、自分の軍師に説得されていた。

しかし、霧花の中の「黄権」は疑惑を進行させていた。

……。

……。

…あの「成り済まし」は、月たちを引き渡して董卓軍を乗っ取ると、今度は曹操と交渉をした。

結果は、見事に帝都の外に誘き出されて「旧」董卓軍は壊滅。

皇帝は、曹操の手中に取り戻された。

・
・
・
・
・

解放された帝都の中で、霧花いや「黄権」は疑惑をさらに進行させていた。

劉備軍は手際良く「より」大きな手柄を立てた。その事自体は喜ばしい。

だが……

（…この「世」はおかしい。いや、この方がマシだろうという事は分かる…）

「黄権」が知っている限りでは、この連合軍は失敗した筈だった。

後漢の帝都として繁栄した洛陽は、この時1度焼け落ちている。

「黄権」の終の場所となった「洛陽」は、曹魏によって再建された都だった。

しかし「今回」は、劉備軍のみならず、曹操軍までが上手く立ち回っていた。

いや、そもそも「前世」の見聞通りなら、さらに数年後に達成している筈の陣容と勢力まで充実していた。

その結果が「燃え無かった」洛陽だった。

(…「この」後の「歴史」はいつたい、どう成って行く?…)

「黄権」が生涯を終わった時点で、天下に太平は訪れていなかった。「魏」「呉」「蜀」に三分されたままであり、太平を知らない「黄巾の乱」以降にもの心ついた子供が、年老いて人生を終えていく時代だった。

だが、霧花の目前での「歴史」の展開は、間ちがい無く「黄権」が見聞したよりも早くなっている。

(…「天」は「歴史」そのものを変えてしまうつもりなのか?ならば、あの「天の御遣い」は…)

霧花の疑惑はある意味では、今や確信未満の“LV”だった。

第7席『帝都落日』～洛陽は燃えているか～（後書き）

それでは続きは次回の講釈で。

次回は 第8席『天の御遣い』の予定です。

御意見、御感想をお待ちしております。

第8席『天の御遣い』

凶馬「てまろ的盧」のタタリなのか？

桃香と「天の御遣い」の2人そろって、洛陽城の水堀に落ちてしま
い、

2人そろって、カゼを引いて寝込んでしまった。

問題は、洛陽で宿営していたのが、馬商人で「義軍」の「スポンサ
ー」でもあった張世平の商家だった事だ。

つまりは、不特定多数が出入りする商家であるという事だった。
ただの宿営ならともかく、カゼの様にウツるかもしれない病人を隔
離できる病室が1部屋しか用意できなかった。

「病人同士で「間ちがい」もないだろう」

「間ちがいが起きても、かまわんつもりなのだろう」

微妙過ぎる表情や生暖かい話し方で、語り合う仲間たちだった。

しかし、霧花には、別の意味で微妙な問題があった。

これで「間ちがい」でもあったら、おそらく桃香と「天の御遣い」
は、1人で行動しなくなるだろう。

そうなったら、自分の持ち始めている「疑惑」を問い質す機会が無
くなってしまう。

ある深夜、ついに決意した霧花は、2人の病室に忍び寄った。

「…ご主人様…」隣の寝台の桃香を起こさない様にささやきかける
と、少女の声だった事と、同じ呼び方をしたためか、

「…ぷにぷに…」などと、桃香の夢でも見ているような寝言を言っ
ていた。

しかし、やがて、夢から現実に意識が戻ったようだ。

「君は?!」と驚きかけて、口に指を当てた仕草を理解したらしい。

「ご無礼は承知ですが、どうしても「天の御遣い」様に御うかがい致したい事がございます」

「まいったなあ…俺は「天の御遣い」なんかと思われているけど、何もかも知っている訳じゃないぞ」

「いえ、おそらくは「天」からすべてを見下ろしておいでの御方ではなくては、分からぬ事でしょう」

…そして霧花、いや黄権は語り始めた。

……。

……。

…霧花がすべてを話し終えた時「天の御遣い」北郷一刀は、桃香がまだ眠っている事を確認すると、あらためて霧花に話しかけた。

「そうだったんだ。霧花は「あの」黄権だったんだ」

「やはり御存知でしたか」

「他の人間だったら、確かに信じられないだろうな。しかし俺は、俺自身が「この」世界に落ちて来ているからな」

「“天の国”からでしたか」

「まあ、霧花もそう思っただけでもないけど」

俺の居た、そうさ、ここでは「天の国」となっている「世界」には、ある物語が伝わっていた。

そう、霧花いや黄権が経験してきた、黄権や劉備が男だった、そして「天下」が三分されてしまった「歴史」がな。

そんな「歴史」が何冊もの「本」やそれに似た物に成っている、そんな「世界」から俺は落ちて来たんだよ。

桃香にも、他の「同志」にも、ここまでは明言していない「天の国」の秘密。

それを霧花にだけは明かしたのは、ある意味で霧花が「同類」と見たから。

「それで納得が出来ました」

それこそ「天の御遣い」でも無ければ、お知りにならない様な事まで御存知かと思えば、

何かが微妙に異なっております。

それこそ、私の様に前の「歴史」の方をこそ、御存知としか思えない様でした。

「でも、桃香たちには混乱させる様な事は言わないでくれるかな」
秘密という程の事でも無いけど、桃香たちにはおそらく、霧花みたくに「前」の劉備たちの記憶は無いだろうから。

「承知いたしました」

「霧花が桃香に、どういう「義理」があるかは、俺が知っているからさ」

「御意のままに」

「それで「天の御遣い」様は、この「歴史」をどうされるおつもりですか？」

「俺だって、そんなに大それた事を考えているわけじゃない。でも、最悪の歴史だけは避けたいと思う」

「最悪ですか」

「霧花は「黄権」だったから知っているだろう」

三国時代の人口は、最悪の時点で「後漢」の5000万人ぐらいから、500万人ぐらいになってしまった事を。

もつとも、俺が知っている事をすべて「天のお告げ」にしてしまつても、その最悪の歴史が完全に回避できるとまで、俺だって自惚れてはいないよ。でも「この」時代を生きている桃香たちは、こんなに一生懸命じゃないか。そんな桃香たちが、結局は「この」世界の「歴史」を作っていくんだよ。俺はせいぜい、その手伝いがしたいと思っている。

「今はそれだけを御うかがい致せば、それ以上を問いません」

「今一つ「天の御遣い」とは無関係に、桃香様の事をお願いいたします」

「前」の歴史を御存知ならば「先帝」陛下が、お妃様などの御縁に恵まれた御方とも言い切れなかった、

その事も御存知でしょう。

「今回の」桃香様が女性として「ご主人様」に御出会いなされた事が、お幸せに結びつかれる様に願っております。

「そうだね。どうやら「フラグ」が立つたみたいだし」

「“ふらぐ”とは？何の意味でしょうか」

「ちよつと失礼かもしれないけれど、勝利すると旗を立てたりするよね」

そういう例えを女の子にしたりする「遊び」があるんだよ。「天の国」には。

……知っていたか、いなかったか？桃香は可愛い、そして優しい寝顔を見せ続けていた……

ただ、小さなトゲが内心に無かった訳でもない。

霧花いや黄権は、結局は劉焉が益州の支配に成功した「時代」に成長し、劉焉の息子の劉璋に仕えた。

劉備の『益州侵掠』の時、最後まで劉璋のために抵抗した「黄権」の記憶を持っている霧花を連れて行くかどうか。

結局は、霧花にしか選択は出来ない事だった。

… … … … …

しかし、本当に「的盧イベント」で「フラグ」を立ててしまったらしく、桃香と一刀は単独行動を取らなくなっていた。

その事自体は、エゴな事を言えば、本心から嬉しい事だったが。

それでも、益州へ向って出発する前に、霧花と密会する必要があるかも知れなかった。

桃香との「フラグ」が立ってしまった以上「不倫」の様な後ろめたさはあったが。

未だ霧花は、劉備軍の行先に関係する重大事、

それも、現時点までは身を寄せていた公孫賛すらいない席での、そうした秘密に關与出来る立場には無い。

それでも、文官たちを中心として交渉や工作が始められ、外部にも明らかにすべきところまで明らかにされ出すと、

霧花たち、中級武将にも相応の発表はなされる。

(…この時が来た…)

劉備に仕官してしまえば、ましてや「天下三分」を画策した筈の軍師が補佐している以上は、

いつかは来る時の筈だった。『益州侵掠』のその時が。

霧花の中では、攻めぎ合っていて当然だった。

何もかもが懐かしい蜀「四川」の山河。

「劉備」に仕える以前の「黄権」の前半生。そして「劉備」への抵抗。

さらには「現世」の最初に、巴郡まで「帰り」嚴顔という「旧知」に「再会」しながら、逃げ帰ってしまった時の激情。

全て、忘れる事など出来ない！！

(…だが！それでも…)

わが主君「劉備玄德」とともに「蜀」へ帰る。他にどうする事も出来ないではないか。

第8席『天の御遣い』（後書き）

それでは続きは次回の講釈で。

次回は 第9席『幼馴染の あこの山この川』
の予定です。

御意見、御感想をお待ちしております。

第9席『幼馴染の あの子の川』

結局「的盧イベント」で「フラグ」を立ててしまった、北郷一刀と桃香は単独行動を取る事が無くなった。

したがって、他の少女との「密会」の機会など無かった。一刀自身にも「浮気」のつもりなら無かっただろうが。

やがて、朝廷から「益州州牧」の印綬を受けて、劉備軍は帝都洛陽を出立した。

東北の幽州へ帰る公孫贛軍とは、黄河のほとりの「敖倉」で別れ、とりあえずは南の荊州へ転進する。

出立までのあれやこれやから、行軍 宿営 行軍の繰り返しになって、ようやくと落ち着いて来た。

そして数日。

明日は予州の許昌城で、曹操の接待を受ける予定になっていた。すでに今夜の野営地は、曹操の管轄下の潁川郡だった。

行軍と宿営が「ルーチンワーク」に成って来たこの数日は、出立前に比較すれば精神的にも余裕が出来ていた。

その中で、一刀はある懸案事項に付いて考える余裕が出来ていた。

その晩の夕食後、当然ながら、桃香をはじめとして主だった同志たちが集まっているが、

その天幕の中に一刀は、霧花を呼び込ませた。

(…事前の打ち合わせは出来なかったけど「中身」は人生経験も充分な「黄権」だから、臨機応変に頼むよ…)

「唐突だけど、霧花には大事な事だろうから」

俺は「天の御遣い」だから知っていたんだけど、霧花にも、実は1度だけ桃香たちにも内緒で確かめてみたんだけど、

霧花には「蜀」つまり益州の土地やそこにいる人たちについて、かなり思い入れがあるんだ。

その理由は、出来れば聞かないでやって欲しい。

でも、霧花が劉備いや桃香に対する忠誠心は、同じ理由から信じられると思う。

だから、桃香が蜀の主になった後で、国主である桃香と蜀の国を同時に守る戦いになったら、

「必ず一生懸命に戦ってくれる。それは信じてやって欲しいんだ」

強引な論法である。

おそらく、説得するのが一刀で説得されるのが桃香でなければ、通用しなかったかも知れないが、

「私は霧花ちゃんを疑ったりしません。ご主人様にそんな風に思われる方がキライです」

などと、むしろ河豚に成りかけていた。

同席していた愛紗たちも、これでは何も言えなかった。

ただ、作戦を預かる側からすれば実際問題がある。霧花を直接に前線へ出すかどうかだ。

「はわ…分かりました」

霧花「クラス」の中級指揮官には、前線以外にも不可欠な任務がいくつかあった。

霧花当人はといえば、主君”たち”「かっぷる」に平伏して、感涙

を流していた。

(…やはり、この御方は「あの」陛下だった…)

……。

……。

…予州許昌から荊州襄陽へと、さらに進軍していく。

「三顧の礼」で迎えた軍師を連れて出発して来た「あの」時の城門に、

あの時も見送りに来た徐庶（蚩）が馬良（胡蝶）を連れて、
出迎えに来ていた。

「蚩先輩ただいま」「あ…胡蝶ちゃんも」

ここの城門の外に、劉備軍はしばらく宿営して待機する事になった。
『益州侵掠』には、荊州「名士グループ」の協力が不可欠なのだか
ら。

… … … … …

この待機の間「水鏡女学院」をはじめとする「荊州名士グループ」
から、劉備軍に仕官する者たちがあり、
彼女たちの地域社会への影響力から、当地の志願兵で兵力を増強す
る事も出来た。

その間、霧花の様に「三顧の礼」の時点で女学院に出入りもしてい
れば、

その後、劉備（桃香）に仕官していた者は、宿营地と女学院を往復
して連絡に務める事になった。

その間に塾生達とは、少なくとも桃香に仕えて益州に同行する事に
した蚩や胡蝶たちとは、

真名で呼び合うようになっていた。

そんな待機の日々がしばし過ぎたころ。今日も霧花は「お使い」のために女学院を訪問していた。

「霧花」「蛭どのか」

「客人が参られた。さつきまで師母が対応なされていたが、桃香様の所へ案内して欲しい」

水鏡先生の「応接室」で紹介された「客人」は、霧花にとっては動揺を隠さねばならない相手だった。

「わが姓は法、名は正、字は孝直。そして真名は狭霧と申します」
四川には、雲や霧にちなんだ「真名」は珍しくありません。

「蜀の犬は太陽に吼える」などと、悪口も言われますが、それだけ水が豊かで、農耕には有利なのです。

益州は「天府」です。

その「天府の国」の主に劉備玄德が相応しいか否かを見極めに来た法正（狭霧）だが、

どうやら、桃香の魅力は、その狭霧までたぶらかしてしまっただけらしい。

桃香本人以外は、その事にはホツとしたものの、

実は狭霧の真名に「霧」があった事に、微妙な心配をした者が2人だけいた。

もともと、一刀には、桃香がもうそんな「細かい事」よりも霧花を信じる事にした事が理解出来る様に成っていたし、

霧花は霧花で、桃香に仕えている事での安心感もあって、法正を懐かしがる感情の方が強くなっていた。

やがて、狭霧たち「益州名士グループ」の中の「劉備派」というべ

き「グループ」との連携も出来上がり、
新任の益州牧の軍は、荊州水軍の提供した船団、
水鏡先生たち「荊州名士グループ」が、荊州州牧に提供させたとも
言う、

船団に便乗して、長江をさかのぼって行った。

当然ながら、霧花もその中の1船に乗っている。

やがて、その船は「あの地」の沖合いを通り過ぎた。

「前世」において、余りにも多くを失ってしまった「あの地」

そして、いかなる「天」のいたずらか「あの地」からやり直す事の
出来た「その」場所。

その沖を通り過ぎて、霧花が身を託した船は益州へと進んで行った。

やがて「三峡」の溪谷に入り込む。

幽州や荊州出身者が多い劉備軍が、その光景に感嘆している中で、
霧花は「黄権」に戻っていた。

さらに進むと、溪谷の向こう側の天地が開けた。

「四川」と名付けられた盆地の周囲を山脈が囲み、その山脈が雲や
霧にかすむ。

そうした「山水」から流れ出てくる「四川」の名の由来となる幾本
もの流れが長江に合流し、

「天府」と呼ばれる、山脈に囲まれた内側に抱かれて広がる平原を
潤おす。

その光景の何もかもが、みんな懐かしい。

その「故郷」から1度は逃げ出した霧花だったが、しかし

(…今度こそ帰って来た。互いに「信じ合った」わが主君とともに
…)

やがて、狭霧たち「益州名士の劉備派」が確保していた地点まで船団は到達して、
桃香や一刀たちは上陸し始めた。霧花もその中にいた。

踏みしめる大地は「四川」の川が、周辺の山脈から運んできた土が積もったもの。

やはり黄砂の降り積もった幽州や洛陽の土とは感触が微妙に異なっていた。

・
・
・
・
・

「残念です。巴城の頑固者^{がんこ}たちは説得できませんでした」

狭霧の報告に桃香や一刀も残念そうだった。

兵法は「戦わずして勝つ」事を進めるが、それ以前に、桃香は「蜀の王」に成るために来たのであって、

戦いに来たのでは無い。

元々「この」桃香は、戦わずにすむなら、という「点」では「前世」の劉備以上ののだから。

霧花にしても、いまさら敵顔と戦いたい理由などありえなかった。

「伏竜鳳雛」が「はわあわ」言いつつも、極小の犠牲で降伏させる戦術をあみだそうとしてはいたが。

第9席『幼馴染の あの子の川』（後書き）

それでは続きは次回の講釈で。

次回は 第10席『豪天砲VS八陣図』の予定です。

御意見、御感想をお待ちしております。

第10席『豪天砲VS八陣図』

霧花に与えられた任務は「上陸地点」の確保だった。

すでに、荊州水軍は、劉備軍の全員を上陸させて撤収していた。

その後に取り残された物資と非戦闘員を、誰かが戦闘中に守っていなければならぬのは確かだ。

そして、益州側から襲撃してこない限り、霧花を「矢面」に出す必要が無かった。

この温情には、素直に感謝するしかないだろう。

蜀には帰りたい。だからこそ、出来れば敵顔とは直接に戦いたくなかった。

やがて、霧花たちを後方に残して、劉備軍は巴城へと接近する。

そして城門の直前に、竜鳳の軍師が練り上げた「八陣図」と呼ばれる陣形で布陣していた。

霧花が後方で守っている「もの」の中には、狭霧のような益州出身者の中の「劉備派」もいた。

「霧花どの」「どうしても、前線に比較すれば話をする余裕がある。

「狭霧どのは何かあるのかな」

「貴女にはまるで、この益州の出身で私たちとも知己のような態度を感じるのだが」

「慣れ慣れしい振る舞いだっただかな」「黄権」の知っていた「法正」の性格からしても、油断が出来るとも限らない。

「いや、何と云うか」

まるで、この「四川」の出身で、私たちとも互いに知り合いの誰か

が益州に戻って来たのに、
私たちの方が貴女の事を忘れてしまった、とでもいう感じに似ているのだが。

実は正解なのだ。流石は法正というべきだろう。

なのに、適当な話をしなければならぬのは微妙に情け無いが、それでも、もう霧花は割り切る事にしていた。

こうして「故郷」に戻っても来れた。ただ1人だけ「信義」を交わした「主君」に仕えることも出来た。

この狭霧も、こう言ってくれているなら、その言葉通り「あの」懐かしい法正だと思えば良い。

「ありがたい。出来ればその言葉に甘えさせてもらいたい」

私は、もう、この蜀からどこへ行くつもりも無い。

だから、先刻、狭霧どのが言ったようなつもりでいていただくと、むしろありがたい。

「この」狭霧が「あの」法正なら、これぐらいで誤魔化せるものでもないだろうが、

しかし、これが今の霧花の本心で間ちがい無かった。

前方の前線では、桃香や鈴々の挑発（最初は説得らしきものだったが）に乗った敵顔が出陣して来ていた。

待ち受けているのは「あの」陣形。そう「蜀の老将」だった「黄権」ならば名高いとすら言えた「八陣図」である。

その「八陣図」の中に敵顔を引き込もうと、愛紗と鈴々、それに星（趙雲）がかかっていつていた。

だが、直接に敵顔と正面衝突している星の場合、星自身はともかく部下の兵士は本気で敵顔に追い立てられていた。

「前世」の敵顔を知っている霧花ですら、流石は敵顔と言いたくなる様な強弓大矢に閉口する兵士を指揮する星は、半ば本気で「八陣図」の中に逃げ込んだ。

その後を追撃しようとする敵顔のさらに後ろから愛紗と鈴々が追いついて、ついに「八陣図」の中に敵顔を引き込んだ。次の瞬間「八陣図」が「正体」を現した。

その「正体」を敵顔が知覚して対応する前に、完全に包囲が完成してしまっていた。

後は殲滅、ではなくて降伏勧告である。だが、

「もうやめてください！」

桃香は本気で敵顔たちを助けようとしていた。

そういう主君だからこそ「黄権」も「劉備」に、そして霧花としても桃香に仕えているのだから。

「私たちは、人々が笑顔で暮らせる国をつくるために来ました」

この「蜀」の国を、力の無い人たちが安心して暮らせる国にするために、あなたたちの力を貸してください。

お願いですから、もう降参して下さい！！

…敵顔は兵士に武器を捨てさせた。だが…

……。

…捕まえている方が困惑していた。

「さつさと斬らんか、侵略者ども」

主君たちや、その側近の後ろから見守る霧花にしてみれば「黄権」

だから、誰よりも敵顔の気持ちは分かる。

だが、ここで霧花（中身は「黄権」）が説得にしゃしゃり出たりしたら、おそらく事態は混沌こんとんとしてしまっただろう。

「どうしたら、信じて貰えますか」桃香はむしる悲しげだ。

「そうじゃな。美辞麗句をいかに並べても、その場だけのことじゃろう。ならば実績を示してもらおうかの？」

「実績ですか」

「そうじゃ。南蛮の奴らが、この益州を困らせているのは本当じゃ。奴らの乱暴をやめに見せられるか」

後漢13州の1つ、益州には四川盆地のみがあるのではない。その南に雲南の高地が広がる。

「現代」ですら、山々の間にいくつもの少数民族が伝統を守り続けている。

しかし、すでにこの時代、この地にも益州に属するいくつかの郡がおかれていた。

つまり後漢帝国の行政範囲にはなっていたのだ。

さらにその南「現代」なら「中国」と「ラオス」「タイ」「ミャンマー」の国境をまたいで広がる領土を支配する、南蛮王、孟獲が雲南を侵略していた。

「蜀」の国づくりのためなら、遅かれ早かれ、戦わざるを得ない敵だった。

同志一同に異存は無い。

……。

……巴郡から劉備軍は転進した。益州の主城「成都」のある西ではなく、雲南の山また山脈が連なる南へ。

敵顔（真名桔梗）も、元のまま巴城の軍を率いて参加していた。

「しかし、お主らの「お館様」も奇妙なお方じゃな。ほんに「天の御遣い」でもなければ知らん様な事を」

巴郡で待機中に荊州から知らせてきていた。孫呉の主将、孫堅の不運を。

そして「天の御遣い」はその事を知っていた。

桔梗にそう聞かれる霧花も「黄権」が中身だから、言いたい事を我慢しなければならなかった。

「その「御遣い」様が「天命」を伝えられたとは、まだ思えませんか？」

「劉玄德どのは、もしかしたら、劉焉とか他の国主が来るよりはマシな国主かも知れん」

最初に侵略者と決め付けていなければ、今頃はたぶらかされていたかも知れん。

じゃが、すべては今回の「南蛮征伐」を見届けてからじゃな。

「それにお主も奇妙じゃぞ、先刻の件とは別に。孝直が言いたい事は分かるな」

「狭霧どのが何と」

「この「四川」の出身で、儂らとも知り合い同士の誰かが益州に戻つて来たのに、儂らの方がお主の事を忘れておる」

そういえば、以前に巴郡にやってきた事があつたな。今にして思えば、あの時からそんな雰囲気だったな。

「そのように見えるのなら、それだけ今の私がこの蜀を終の住処にする覚悟が出来たのだと」

そう思っていたきたい。それが私の本心なのですから。

第10席『豪天砲VS八陣図』（後書き）

それでは続きは次回の講釈で。

次回は 第11席『七たびとらえて七たびはなつ』の予定です。

御意見、御感想をお待ちしております。

第11席『七たびとらえて七たびはなつ』

山また山脈の雲南でも、そこは大陸。
山と山の間には、それなりの平野があり、そこに劉備軍と南蛮軍が
布陣していた。

その「劉備軍」が自軍の半数ほどしかいないと見たのか、南蛮軍は
いかにも「蛮軍」らしい勢いで先制攻撃に出た。
ただし、敵はもう2軍いたのだ。

南から北へ向かう南蛮軍と、北から向かい合う劉備軍。その東から
接近する軍の武将は星。軍師は胡蝶。

さらに、西から接近する軍の武将は桔梗。軍師は狭霧。

「儂^{わじ}らをまるで荊州か、いつそ幽州から連れて来た者みたいに使う^{つか}
てくれるのう」

「そんな事も考えていらつしやらないでしょう。あの方たちは」
ただ「伏竜鳳雛」は、敵將軍が長兵（射程の長い兵器）に熟練して
いるとは考えたでしょうが。

その通りだった。桔梗たちには、虎牢関以来自慢の連弩^{あす}を預けてい
たのだ。

その連弩部隊を直接に指揮しているのは霧花だった。

・
・
・
・

四川に生まれ育ち「蜀」に仕えてきた「黄権」にしてみれば、

南蛮から益州を守つての戦いは、自分が守るべきものための戦い。

「あの戦い」で蜀に帰れ無く成つていなければ、当然に「その翌年」
の「南蛮征伐」には従軍していただろう。

「その」戦いを、ともに劉備に「使えてきた同士」の「法正」（狭

霧)や「蔽顔」(桔梗)と同じ軍で戦う事が出来るのだ。霧花にしてみれば「黄権」の晩年「魏」の武将として戦わされた、どの戦いよりも充実していた。

南蛮軍が正面衝突した劉備軍は、数こそ半分ほどでも、今までの益州地方軍とは質が異なっていた。

当然である。桃香と「天の御遣い」の下に、愛紗・鈴々・朱里・雛里がそろっていたのだから。

… … … … …

いかにも蛮兵らしい勢いと数を頼んで押し寄せる南蛮軍を、劉備軍の本隊が押しとどめている間に、

桔梗、狭霧、霧花たちの指揮する長兵が南蛮軍から見て左手、すなわち、矢を防ぐ盾を正面の敵に向けたために、無防備になっている側から接近した。

狭霧の戦術眼と桔梗と霧花の「老練」によって、最大効率で統制された1点集中射撃が、

正面の戦いに熱中する南蛮軍に迫っていた。

… … … … …

「1点集中…狙え…撃て！」

桔梗は、自ら豪天砲を放つと同時に、連弩を一斉につるべ撃ちさせた。

完璧な1点集中射撃が完璧な「ポイント」に打ち込まれた。

何本かの矢に襲われた1人が、その衝撃で跳ね飛ばされて周囲の何人かを巻き込む。

あたかも、塹を打ち込まれた石が砕けるように、反対側へ陣形を崩した。

その方向には、星と胡蝶の率いる騎兵が待ち構えていた。

「白眉」をもってすら「ここは突撃するしかない」その「タイミン

グ」で

星は指揮する騎兵の全軍を、ひたすらただ突撃させた。

ドミノ倒しのように崩れかかる、その出鼻を思いつ切り叩かれて、もはや統制を取って戦う兵士ではなく、逃げ惑う群集となった南蛮兵たちは、

唯一、敵のいない方向、すなわち最初の布陣での後方へ逃げ散った。

その後を追って、劉備軍はさらに雲南の南へと進軍して行く。

……。

……。

…第2戦。南蛮王孟獲は前回の敵の戦術をそのまま、そっくり真似して「お返し」を狙ったが、

自分が使用済みの戦術の弱点ぐらい把握はかしていない「伏竜鳳雛」ではない。完璧に各個撃破されてしまった。

……。

……。

…益州永昌郡。すでに益州も南端の“南蛮”との“国境”の郡。

南蛮王孟獲の軍は、すでに劉備軍から6度敗走し、ここまで追い返されていた。

次の第7戦にそなえて、竜鳳の軍師が全軍に指示した陣形は「八陣図」今度は逃がさないつもりだった。

ようやくと霧花も思い出した。

「前世」で「黄権」が従軍していなかったから、6度目まではワザと孟獲を逃がしていた事にやっと思いいたった。

そして、永昌郡も南西の「後漢」帝国が「南蛮」との国境線と設定した「1線」が、すでに間近い山際の盆地で、

南蛮王孟獲が率いる南蛮軍と、劉備軍は7戦目を戦っていた。

この第7戦で使用されたのは「伏竜鳳雛」がお得意の「八陣図」完全に包囲してしまえば、そのまま殲滅するのも降伏勧告するのも、動機と結果は正反対ながら、こちらの思いのまま。

桔梗などは自分も犠牲者だけに、南蛮に同情すらした。

彼女の時と同様、包囲が完成した段階で桃香が説得を始めた。その途中、

「もう、ごうしゃんにゃのにゃ」

…ちよつと、思いつ切りが良くないか？

「しよのしようこに、まにゃをおしゅえるにゃ〜。みいはごうしゃんしゅるにゃ」

「この「世界の少女たちにとって、真名を教える事がどんなに重大な意味を持っているか。

これが「漢人」同士なら、これだけで、降伏を信じてもいいかも知れない。だが、

「“南蛮”にも、真名つてあるの？」

いずれにしろ「七だびはなつ」の作戦方針からいえば、願ったりだ。南蛮兵たちも次々に武器を捨てだした。一番外側の兵だけは流石に盾を構えて身を守っているが、もうそれだけ。

それを確かめて軍師の白羽扇が振られる。「八陣図」がまた形を変え、包囲がゆるめられた。

…
…
…
降参した南蛮王孟獲（美以）が、桃香や一刀たちと対面している。見た目やしやべり方、それに“南蛮”に対する先入観からすれば、話している内容はしっかりしていた。

従来の国境、つまり益州永昌郡までは「漢」の領土だと認め、それ

「これらを持って帰るのは、これから大事な意味を持ちます」竜鳳が明言していた。
すなわち、南蛮との問題を解決したという証拠品。
「この「証拠」をもって、桔梗さんとかが説得すれば、大きな効果が期待できます」

確かに、巴城に立て籠もって、劉焉を益州に入れなかった嚴顔（桔梗）だから説得力がある。

そこへ「実績」を示すこの「証拠」が加わるわけである。

「それで、成都を守っている賈龍かりょうさんが、納得してくれば、無駄な戦いをする必要がなくなります」

・
・
・
・
・

桃香や一刀たち、同志一同の目的は「蜀」の国づくり。

戦う事が目的で、益州を侵掠したのではない。

前々任の益州刺史が戦死した後、その補佐官だった賈龍が有志を集めて益州を守ってきた。

その功績を認めるつもりはあっても、出来れば戦いたくは無い。

霧花にしてもそうだった。

「南蛮」から守るべきものを守って戦う間に、霧花は心から「黄権」に戻る事が出来た。

もう、狭霧や桔梗も、懐かしい「法正」や「嚴顔」としか思えない。それに「今」の成都には「劉備」の前に仕えた「あの」主君が居るわけでもない。

この上「益州」の兵と戦う理由が霧花には無かった。
成都に帰る理由こそ、当然に帰るべきだったろうが。

巴郡まで戻って来た劉備軍は、益州の州都、成都を目指して四川盆地を横切るように進撃し始めた。

だが、決して自分から戦おうとはしない。

すでに同志となった狭霧や桔梗たち、益州出身者たちが同郷の者を説得し、

無血で開城させては、着実に前進して行く。

こうして、盆地の中央付近まで来たところで劉備軍の主力は進撃を休め、

桔梗や狭霧たちが成都へ説得におもむいた。

後は成都に入城するだけだろう。劉備軍としては。

従軍する霧花にとっては、帰る道だった。

蜀の国主の城であり、そして「黄権」にとっては仕えるべき主君の城である成都。

その成都に、もうすぐ帰れる。

霧花にとっては、その内心の準備期間を意味していた。現在、進軍を休めている事は。

第11席『七たびとらえて七たびはなつ』（後書き）

無謀と思いつつも書き始めた、この未熟な作品も、とうとうここま
でたどり着くことが出来ました。

それでは続きは次回の講釈で。

今回は 最終席『帰りなん成都』の予定です。

ここまで、読み続けてきていただいた皆様には、心より感謝いたし
ます。

また、温かいご意見・ご感想をいただいた方々には、重ね重ね、お
礼を述べさせていただきます。

最終席『帰りなん成都』

長江沿いに四川盆地に入った巴郡から見れば、同じ四川盆地にある隣の郡が「益州巴西郡」である。ここが「黄権」の出身地だった。その巴西郡での黄一族との「再会」は、狭霧や桔梗の時と同様な結果になった。

数えてみれば「前世」の黄権が「現在」の霧花の見た目程度に幼かった年代の筈である。なぜなら、まだ「黄巾」が片付いたばかりだからだ。

そのためか「黄権」がまだ若かった頃に先立たれた年長者ばかりが、まだ若くして存在していた。

その黄一族にしても、自分たち黄一族の誰かが巴西に戻って来たのに、まるで、自分たちの方が忘れているみたいだと言いつつも、しかし、霧花を温かく迎えてくれた。それで充分だった。

もっとも、魅力だけは有り過ぎる主君がたぶらかしてくれた、そのためかも知れないが。

こうした面倒事を、面倒事とも思ってもいないような桃香も、やはり劉備らしかった。

後は桃香を成都の主にするだけだ。霧花にはもう決心をするまでも無い事だった。

……。

…劉備軍は四川盆地の中央まで、もうほとんど戦う事も無く進軍し

ていると認められた。

劉備玄德が「蜀王」となる、その時がついに来る。

・
・
・
・
・
その時。

久し振りの晴天の下、もはや抵抗勢力も無く、劉備軍は成都へ進軍する。

その道は、通い慣れた道だった。

若き日の「黄権」が「成都」で仕官するため、故郷の巴西郡から成都へ向つて以来、何度通つた事だろう。

ある時は益州のどこかの地方官に就任するため、ある時は「蜀」を守るため武将として出陣し、

また、ある時は、そうした地方官や武将たちの元へと「成都」に居る主君の命令を受けておもむいた。

そうして任務を終えれば、成都へと帰っていった。

今進んでいる方向と、同じ方向へと。

その同じ道を「かつて蜀の王として仕えた主君」に従って、霧花は進んでいった。

成都へ「帰る」ために。

周囲を振り返れば、天地の境目には「四川盆地」の周囲をめぐる山脈が連なり、その山脈が雲や霧にかすむ。

そうした「山水」から流れ出てくる「四川」の名の由来となる幾本もの流れが長江に合流し、

「天府」と呼ばれる、山脈に囲まれた内側に抱かれて広がる平原を潤おす。

その水が周辺の山脈から運んできた土が積もった大地の「山林藪沢」さんりんそうたくの間に、水田や人里が散らばる。吹く風も心なしか霧や雲の匂いがする、そんな気持ちもするだろうか。

洛陽や、黄河の南北の光景は、地平線までも黄砂の降り積もった黄土の平原が続く。

吹き寄せる風にすら黄砂が混じっていた。

いわば「黄土」の国とすれば、四川は「山水の国」だった。

そんな「黄権」にとっては見慣れた、それゆえに複雑な感傷のある光景の中を、

霧花は劉備軍に従って進軍して行った。

……。

……。

…そうして進軍する事、数日。ついに成都の城壁が劉備軍の視界の中にとらえられた。

成都城の外堀の役目をする「流江」に、行軍の先頭が差し掛かった辺りで、全軍が停止した。

流江にかかる橋の手前で、劉備軍を出迎えている人物がいた。

開け放たれた成都の城門を前に、益州刺史の補佐官だった賈龍が出迎えて来ていた。

その賈龍が桃香の前に膝をつき、両の手のひらに錦にしきを広げその上に乗せたある物を差し出す。

益州刺史の「印綬」いんじゆ 印章とそれを身に付けるためのひもを組み合わせて皇帝から与えられる。

刺史の戦死後、補佐官の賈龍があずかり益州を守ってきた。

無論、桃香は「益州州牧」の印綬を新たに与えられている。すなわち、その新しい印綬のみがこれより有効である事を、儀式によって示しているのだ。

その「印綬」を桃香が受け取った瞬間、劉備軍の全軍が一斉に歓声をあげた。

その時、劉備玄德は「蜀の王」となった。

行軍の後方で霧花も唱和しながら、ひそかに感傷を覚えていた。

……やがて、再び行軍が動き出し、順に成都に入城していく。

霧花も城門をくぐった。「黄権」には通い慣れた城。

故郷の都。自らの主君の城。

(…帰って来た。私には帰る事が出来る場所があった。何もかもが、みんな懐かしい…)

城内から見上げる空は「黄権」には見慣れた、

今日も雲が流れ、太陽までもが霧の向こうで優しくにじむ、そんな蜀の「天」だった。

.....

これ以降の霧花、すなわち黄権の後半生については「後世の歴史書」にはこう記録されている。

「益州各地の地方官を歴任し、平穩無事に天命を全うした」

最終席『帰りなん成都』（後書き）

ここまで読み続けて来ていただいた皆様方には、あらためて、厚く
お礼を申し上げます。
作者 高島智明

今更ながらですがオリジナルキャラクターの1覧（前書き）

今更ながらですが、**十十恋姫無双演義十十**および外伝的作品に登場させました、

オリジナルキャラクターに關しまして、

「こんなイメージかな」と思いながら執筆しましたキャラクターやCV、インスパイア元などを、

とりあえずは、1覧にしてみようと想いました。
皆様の御1助に成りましたら幸いです。

今更ながらですがオリジナルキャラクターの1覧

曹仲徳

容姿に関しては、北郷一刀と同程度には「イケメン」の端くれに引つかかる。

CVのイメージも容姿を裏切ら無い。

外見年齢は一刀（高校2年生）と同年代に見えるが、実は「現世」年齢は姉（華琳）より2才ほど下。

そのため、華琳の方が一刀の年齢に近い筈だが、外見が14才くらいに見えているため、

仲徳が「姉さん」と呼ぶと、はた目には「ギャップ」がある。

姉の方が、確信的に呼ばせているフシもある。

貂蝉

完全に「原作」キャラより改変。

容姿・CVは朝比奈みくる（大）（涼宮ハルヒ）にアクビ娘（ハクシヨン大魔王）のコスプレ。

華佗

これも「原作」キャラより改変。

イメージとしては、TVドラマ版「JIN」で大沢たかおが演じたキャラクター。

曹騰（真名）華恋

華琳（外見14才）の母親にしては（実は祖母）少しばかり熟女と見える様な容姿・CV。

しかし、如何にも華琳（大）

現在の華琳が小さいと言えば「将来は有望」との反論の根拠に成りそう。

徐庶（真名）蚩

頼れる「先輩」タイプのキャラクター。外見年齢「大学生」くらい。容姿・CVのイメージは、桔梗や祭の若い頃を連想しそうな感じ。

水鏡先生

読み直した結果「アニメ版」のキャラクターで矛盾し無かった。

簡雍

好い意味での「お坊ちゃん」キャラ。人なつこい。鶴屋（涼宮ハルヒ）に兄が居たら近い（？）

盧植

横山光輝氏作画の劇画版での同キャラクター。

何進

読み直した結果「アニメ版」のキャラクターで矛盾し無かった。

孫堅（真名）水蓮

雪蓮（大）。見た目からして母娘。

済成

池上遼一氏作画の劇画版「演義」に登場する黒幕悪漢キャラよりインスパイア。

劇画の元キャラからして、いかにも月ちゃんの罪を被せそう。

「羅馬」から来た「老師」

「スーパージャンプ」誌連載中の「王様の仕立て屋」に登場する、ジャンニ・ピアッツォ。

馬良（真名）胡蝶

好い意味での優等生キャラ。

イメージとしては、浅倉涼子（涼宮ハルヒ）正し、眉が白く長い。

魯肅

好い意味での「お坊ちゃま」キャラ。正し、簡雍よりは生真面目。

張昭

読み直した結果「アニメ版」のキャラクターで矛盾し無かった。

馬騰（真名）翡翠

チャンスさえあったならば、桔梗や祭と好い3人組に成りそうなイメージで。

案外「虎牢関」の時には、チャンスがあったかも。桔梗が巴郡を離れられたら。

報徳（真名）碧玉

翠と蒲公英の間で「次女」していそうなイメージで。

韓遂

「松永久秀の前世でも不思議は無い」という記述通りのキャラクター。

諸葛瑾

朱里と対面していると、確かに「お兄さん」にみえるイメージ。

外見年齢「大学生」くらい。徐庶（蛍）と同期の裏設定。

張燕または飛燕

没ネタながら、カリーニン少佐（フルメタル・パニック！）から
インスパイアした事あり。

管路

残念ながら「小説版」とは別キャラ。「この」世界で女性として生まれ育った人。

「現代」の『科学者』に対する様な待遇を受けていて「大陸1番」は、決して自称に限らない。

劉表

横山光輝氏作画の劇画版での同キャラクター。

献帝

正太郎複合体タイプのキャラクターと、見ようと思えば可能。正し「天の御遣い」には、そんな気は無し。

司馬仲達

イメージとしては、林水敦信（フルメタル・パニック？ ふもっふ）策士タイプだが、この「外史」では誠心誠意タイプで、職務にも熱心。

黄権（真名）霧花

容姿・CVのイメージはグリシーヌ・ブルーメール（サクラ大戦）
巴里は燃えているか）

正し、外見年齢は鈴々・朱里・雛里くらい。

今更ながらですがオリジナルキャラクターの1覧（後書き）

とりあえずは「こんなイメージ」で読者の皆様に伝わっていれば、と、特に想うキャラクターを並べてみました。

勝手ながら、今後も適時、追加が有るかもしれません。

更に勝手ながら、これ以外に登場させたキャラクターに関しましては、

皆様方の豊かなる想像力に委ねたいと存じます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8619g/>

恋姫無双演義～黄権伝～

2010年10月11日17時59分発行